

---

# 太陽の休日

紅茶檸檬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽の休日

### 【Nコード】

N1529T

### 【作者名】

紅茶檸檬

### 【あらすじ】

平凡だけど、自分の将来に漠然とした不安を感じる女子大生カツキの、とある休日のお話。

(前書き)

「休日」というお題で一本書いてみました。  
感想批評どしどしお寄せ下さい。

『太陽の休日』

木曜日の夜。時計がPM21:00を示すちょっと前、カヅキは日々の習慣でNHKにチャンネルを回した。そして思わず舌打ちをした。そんなカヅキを、ママはちよつとだけ窘める。

「こら、カヅ。舌打ちは癖になるからやめなさい。はしたない、と言っより嫌われるよ?」

「だってママ。……土曜も日曜も雨だって。桜散っちゃうよ。お花見出来ないじゃん」

週間天気予報によれば、『週末は全国的に雨。傘が手放せないでしよう』とのこと。うそーん。カヅキは盛大にため息をつく。

「キョウコとかユリっちとかと約束してたんだよ、夜桜見に行こうって。お酒飲んでついでに花火なんかしちゃったりしてっっている計画してたのに、全部パーじゃねえかよおおおお」

絶叫するカヅキを、ママは冷めた眼で一瞥する。

「あんたねえ……そんなことばかり考えてるからバチが当たったんじゃないの? 卒論はどうしたの。このままじゃ就職どころか卒業も」

ああもう分かった分かった　ママはことあるごとにソツロンの四文字を口にする。ここ最近は特に。無論心配もあるんだろうが、それ以上に“不毛な会話を打ち切るには、この方法が一番手っ取り早い”と、ママ自身が最も理解しているからだ。そのことはカヅキも薄々気がついてた。

確かにうちには手のかかる子供が二人もいますし。あたしもハタチを過ぎたとは言えまだまだ子供ですけど。天気に対するやるせな

いい思いぐらい、聞いてくれたっていいんじゃないやございせん？ カヅキは二重にショックを受けて、当然机に向かう気力もなくベッドに倒れ込んだ。

三宅家の長女、香月二十一歳。下には十七歳と十一歳の弟がいる。芸術学科の、多分ごくごく一般的な、普通の大学生。来年には卒業なんだけど、さっきママが言った通り就職先なんてものは決まっていなかったりする。えへ。

……そりゃあたしにだって、夢とか希望なんてものがあつたこともありました。でも今は不安とか、焦りとか、そういうどうしようもない現実ばかりが眼の前を覆っていて。やっぱりあだし、普通でいいや。就職出来るかどうかは分かんないけど、ママやその他大勢のように普通に恋をして、いずれ結婚して子供を産んで……。  
「うえっ……」

最近そんなことばかり考えては、息が詰まる。むねがくるしい。学校では特に何事もないように振る舞っている。つもりだった。くだらないことでうじうじ悩んでる自分なんて誰にも見せたくないし、何よりそんな自分は自分が一番嫌い。そうやって無理をするから余計に苦しくなるのかもしれないけど。

そのようなカヅキの心境を知ってか知らずか、高校時代に出来た友人二人。今は別の大学に通っている。が、「花見に行こうぜ！」と声をかけてくれた。嬉しかった。……そうだよね、たまにはパーっとやらないと！

ところがにつつき傘マーク。あいつのせいでせつかくの休日がない。日本の文化の象徴である桜が……！……なんかもうマジで絶望的……。あたしもいつそ桜のように散ってしまいたいわ。辞世の句は『夢見花 永久に咲けよと 祈りつも 定めゆえ散る 儂さよ』。字余り。うんこれでいい、もう思い残すことは何も。

本当に死のうとか物騒なことを考えているわけではなくても、ヤケになって人生終わったみたいな感覚。もういいや、全部どうでも

。そんなお先真っ暗な心理状態で、カヅキは眠りについた。

翌日の、キヨウコからのメール。

『明日どーする?』

『どーつつても、雨じゃしょうがないじゃん』

『そうだけど……せつかくだから久々に集まりたいじゃん、花見は無理でも』

そんなこと言っただって、雨なのよ? 傘がないとどこにも行けないのよ? 集まるにしても誰かの家とか? うちは無理だよ、うるせー弟が二人もいるんだから。

結局何も決まらずじまい。あーユウウツ……。仕方ないから不貞寝してよう、でも卒論やんないと……。カヅキはものすごくもやもやししながら金曜日を終えた。

「じゃーんっ!」

何の連絡もなく突然やってきたキヨウコとユリは、二人ともレインコートに身を包んでいた。靴は長靴。

「完全装備! えへへ、昨日買ったんだー」

満面の笑みを浮かべるキヨウコ。黄色のレインコート。

「キヨウコったら私達に分まで買ってくれたんだよ。はいこれ、カヅキの」

水色のユリがそう言って、地元のデパートのビニール袋を差し出す。

おいおい、だいがくせーにもなって雨がっぱかよ……。カヅキは内心呆れつつも、苦笑しながらビニール袋を受け取った。中のかっぱは真っ赤だった。

雨がっぱを羽織ったカヅキは、やっぱりめんどくさいなあと思いつつも、二人と共に近所の公園へ出向いた。

「花見って言ったら桜もだけど、屋台で買い食いするのが一番の楽

しみなのになー」

ユリがいかにも残念そうに呟いた。

「だよなー、あたしじゃがバター絶対食べようと思ってたのに。屋  
台の食べ物って、なんかみよーにおいしいよね！」

キヨウコは楽しげに返したけど、カヅキはいまいちこの状況を楽し  
めずにいた。

……なんでだろう、ってかあたし、浮いてない？ 彼女達と会う  
のは何ヶ月ぶりだろう。そして自分もこの日を楽しみにしていたは  
ずなのに。なんだか二人の姿が、とてもとても遠くて。

「カヅキ……もしかして調子悪い？」

「えっ？」

ユリに突然声をかけられて、カヅキははっとして顔をあげる。

「うん、なんか元気ないよね……悪いことしちゃったかな」

「な、何言ってるの。そんなことないよ」

咄嗟のことに、カヅキはありきたりな言葉しか返せなかった。で  
も嘘はついていない、はずだ。

「うーん、今はいつも一緒にいるわけじゃないし、なんで悩んでる  
のか分かってあげられなくて悪いんだけど」

キヨウコがいつものように、こざっぱりとした口調で言う。それ  
が彼女のいいところ。そしてみんなに好かれる理由。

「一人で抱え込まずに相談してみたら？ ……無理とは言わないけ  
どさ」

なんだかなあ カヅキはぼんやりと思った。

自分ではうまく隠しているつもりだったのに、この二人には簡単  
に見透かされてしまった。それどころかいらん心配までかけて。

あたしは大丈夫。そう喉まで出かかったけど、結局すぐに引っ込  
んでしまった。

「……二人は進路、決まってるんだっけ」

不意にカヅキの口をついたのは、そんな疑問。そう言えばお互い  
に報告してなかったはず。

「進路って……さすがにこれ以上勉強はしたくないなあ。かと言って会社勤めもいやだし」

「え？　じゃあどうすんの、フリーター？」

「多分ねー、さすがにニートはまずいしねー」

キヨウコはケラケラ笑っている。つくづくのんきなヤツ。

「えつと……ユリっちは？」

「わたし？　免許取るまでは教育実習生かなあ。他にやりたいことがないわけでもないけど……」

あ、そうだよな。ユリは学校の先生になるんだもんね。馬鹿なこ  
と聞いちまった。

「カヅキはもの作りがしたいんだよね」

「へ？」

我ながら間抜けな声だ、とカヅキは思った。

「なんか抽象的だけど、ずっとものを作り続けたいって言ってなかつたっけ」

「……………」

そう、自分自身よく分からないけど、カヅキの夢はものを作ること。生み出し続けること。それが誰かの役に立ったり、感動を呼んだり出来たらいいなあなんて、ぼんやりと考えていた。でもそれが何であるのか分からなくて、ずっと苦しんでいた。だって私にはなんの才能もないんだから……。

「よし、じゃあ砂場行こう！　砂場行ってなんかつくろう！」

キヨウコが声を張り上げる。

「なんかってなに？　なにつくればいいの？」

ユリが問い返す。

「知らね。つくってるうちになんかになるんじゃない？」

そう言っただけでキヨウコはバタバタと駆け出した　後ろ姿が本当に子供みたいだ。でも。

そっか　何が出来るか分からなくても、とりあえずやってるうちに形になるのかも。イビツでもいい、挑戦して完成させなきゃ。

カヅキには、具体的にこれを作りたい、という欲求がなかったのだ。でも、やっぱり何かを作るのが好きだった。楽しかった。

図工の時間に作った貯金箱とか、中学生の頃の卒業制作とか……。それらはずっと形になって残り続けるのだ。たとえ作った本人が、そのことを忘れてしまっても。

三人は砂場で、あーでもないこーでもないと言いながら砂をこねる。

「やだ、粘土みたいで楽しーっ」

そう言うユリの頬には泥がついていて、それがなんとも言えず可愛らしい。水分を含んだ砂はひんやりとして、触っているだけでも気持ち良かった。

「いいねえ泥遊び！ ……泥団子完成っ！」

「あははは、どーすんのそんなもん作ってさー」

「お前に投げるのさ。えいっ！」

ちよつとやめてよ、あたしやられたらやり返すよ！ カヅキも負けじと、掬った泥を投げつける。新品のレインコートがもうドロドロだ。

休日には休む為のもの。でもたまにはこうやって、馬鹿みたいに遊ぶのも悪くないね。人生には息抜きも寄り道も必要だもの。なんつって。

カヅキはふと空を見上げた。ああそっか……。太陽だって年がら年中力を出してたら疲れちゃうもんね。たまにはゆっくり休まないかね。

今日と明日が例え雨でも、そして桜が散ってしまっても。何日か後にはまた会えるよね。

今日は太陽の休日。どしゃぶりでびしょぬれでも、カヅキの心は晴れ晴れとしていた。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1529t/>

---

太陽の休日

2011年5月9日22時25分発行